

「都市幼児の健康・安全の形成と生活環境に関する調査」

齊藤 歆 能（横浜国立大学）
高城 義太郎（玉川大学）
高野 陽（国立公衆衛生院）
荻須 隆 雄（玉川大学）
山下 朋 子（御茶の水大学）

小児の健康は環境条件の影響を強く受けることは古くから指摘されている。また、都市幼児の微症状や事故発生は家庭・地域社会の生活環境条件と相関が高い点が述べられている。それ故、小児の生活環境の改善に関する指導は重要な事項となっている。しかし、小児の生活環境は建築物の狭小化、新しい建築様式、建築素材の開発普及、遊び場の喪失、交通量の増加など多くの変容がみられる。これら生活環境が小児の健康に及ぼす影響については必ずしも十分な情報を入手しているとはいえない現状である。

今回の研究においては、小児の生活環境に視点をおき、その環境に対する母親の働きかけと、子どもの健康との関わりを捉えることを目的に研究を進めている。

小児の生活環境は発育発達にともなって拡大されていくが、数多い生活場面のうち、最も身近で接する時間が長いのは家庭であるので、家庭を中心とした生活環境を中心に検討を加えている。

本年度の研究は、東京都内、神奈川県の大都市

を中心に「小児の生活環境に関するアンケート調査」を実施した。本調査では幼稚園、保育園に幼児を通園させている母親を対象に、施設を通じて約1000名を対象に回答を求めたものである。本年度の調査では、小児の居住環境を中心に調査を実施した。調査の内容は、家庭環境、・健康の実態、・現在の住居の状況、・住居階数、・居室数、・子ども部屋の有無、・自宅付近の環境、・健康と環境の関わり、・住居と交通量、・住居と環境衛生、・小児の事故災害などに視点をおき作成をした。

今回の研究では、健康と事故災害の視点から居住環境の問題を解析し、それに関する母子相互作用について検討を加えているものである。現在、回収したアンケート調査の結果を集計中であり、本年度中には初年度の研究成果をみることができると思われる。

今後は、都市幼児の健康・安全行動と生活環境および母子相互作用との関わりを中心に調査研究を進める予定である。